

川口天満宮社殿の修築と職人

竹中 友里代

はじめに

川口村は、八幡外四郷のひとつであるが、明治元年の木津川付け替え事業によって、外四郷の美豆・際目・生津の三ヶ村が京都市域に編入され、川口村のみが唯一八幡市域に残った。山下町並が広がる内四郷に対して、神領の東の農村部にある外郷を知る史料は極めて少ない。

八幡市川口堀之内 152 にある天満宮は、平成 20 年 3 月から始まった社殿改築工事に伴い、社殿屋根裏から 6 枚の棟札が発見された。また屋根から下ろされた獅子口瓦にも刻銘があった。これら新出土史料の紹介し、社殿造営の歴史と銘文、石清水八幡宮領内の建築職人との関係を述べる。

1. 棟札

最も古い年紀をもつ棟札①の墨書銘から、当川口地区の天満宮が造営されたのは、慶安 2 年（1649）林鐘二日である。林鐘とは旧暦 6 月の異称である。

施主には三人の名前が記されており、右端から山城国愛宕郡深草の住人で、桐山重次の娘であり大澤氏に嫁いだ「金」、中央に伊勢国多気郡出身で京三条の大澤助次郎尉宗国、左端にその子大澤三郎兵衛尉安勝である。京三条に居住する大澤宗国夫妻とその息子が施主となっている。このとき大工棟梁は、京都在住の西田佐左衛門正重であった。この施主の 3 名と大工については不明である。しかしいずれにしても、慶安 2 年川口村の氏神天満宮が造営され、その時京の都の住人が中心となっていたことは確かである。

次に②の棟札から、寛政 10 年（1798）3 月に社殿の造営と屋根の葺き替えが行なわれた。慶安の造営から寛政までおよそ 150 年あり、その間修復がまったく行なわれなかつたとは考えにくいが、この間の経過については、不明である。

さて、この寛政度の工事では、川口村の村役人である年寄りの奥村四郎兵衛・西川五郎左衛門・東村亦兵衛の 3 人と安楽寺の住職法印竜動が中心となっている。

安楽寺とは、当天満宮の神宮寺で、境内地の東に隣接して存在した。この安楽寺については、太宰府天満宮の神宮寺安楽寺にならったものであろうが、当村に伝来する寛文 9 年（1669）「川口村天満宮縁起」⁽¹⁾（113 頁）に記述がある。

それによると後花園院の御代、正長元年（1428）から寛正 5 年（1464）に筑前国より安楽寺の権僧都聖通法印が上洛し、この川口村に住みついた。聖通が筑紫から持参した天神の御影像を天満宮に

寄進し、神宮寺の別当として兼帶したと記す。

後花園天皇の時代 15 世紀は南山城一帯では、自治的村落である「惣村」が成立し、寺内町や環濠集落を形成した。川口村の字名は川口堀ノ内で、八幡市内でも代表的な環濠集落の形態を残す。おそらく川口村でも室町時代に集村化し、惣的結合の精神的紐帶として、氏神である天満宮での宗教活動が位置づけられ、宮座の運営や神宮寺が整備されたのであろう。

川口村では、中・西・東の三座の宮座があり、現在も正月には各座から頭家 3 人が白の神官装束で、神社に集まり、参拝して供物を捧げる。棟札に記す年寄は、この三座の頭家を務める家である。

さて、話しを建物に戻すと、棟札②の寛政 10 年、この時の工事を担当した大工は、八幡の倉橋市左衛門尉で、檜皮葺替えの屋根修復が行なわれた。檜皮職人は、「吉井太郎兵衛正信」と「吉井弥兵衛正吉」があたった。これら職人については、現存する棟札等の銘文から石清水八幡宮の建造物にかかわった職人を別表（114 頁）にまとめた⁽²⁾。それによると檜皮葺職人吉井氏については、石清水八幡宮の摂社石清水社に、天明 8 年（1788）の棟札が残り、そこに柴田文治郎とともに「吉井弥右衛門・弥兵衛」の名が記されている。また同建物には、宝暦 3 年（1753）の棟札もある。そこには、「平谷町弥兵衛」の名が見える。また石清水八幡宮の末社水分社本殿は川口村の社殿と同じ寛政 10 年に上棟された。その時の棟札にも屋根工として文治郎とともに「弥兵衛」の名が記されている。おそらくこの「弥兵衛」は、川口天満宮で檜皮の葺替えに当たった「吉井弥兵衛」であろう。この吉井氏は、八幡平谷町に居住し、18 世紀中ごろから末にかけて、八幡宮境内地の摂末社の屋根修復に当たった職人であり、外郷の川口においても力をふるっていたのである。

なお、大工は倉橋市左衛門尉については、八幡の大工と記されているが、別表からも今のところ八幡宮関係の工事に携わった事実が確認できない。おそらく百姓町人の町家など一般の住宅建築を主な仕事としていたのでなかろうか。このことからこの時の造営は、建物の改築といった大工事ではなく、比較的軽微な修復であり、屋根葺き替えが中心であったかもしれない。

次の③の棟札は、天保 11 年（1840）川口村の年寄西兵兵衛と東村儀左衛門・長兵衛の三名が中心となり、檜皮の葺替えが行われた。担当した職人は、八幡平谷町に居住する檜皮師の「文右衛門」と京から助っ人としてやってきた「吉兵衛」、同じく京の「八之助」と「音吉」であった。

④の棟札では、明治 7 年（1874）檜皮の葺替えを八幡の柴田文右衛門があたった。前述の天明 8 年石清水社の修復棟札にも「柴田文右衛門」の名が見え、同建物が文化 12 年（1815）に再び修復されたときも檜皮師柴田文右衛門が、さらに安政 4 年（1857）にも檜皮師として「文右衛門」を記す。

この柴田氏は、近代に入り、為吉、茂兵衛と代替わりしても、石清水の摂末社の屋根修復を行い、その名は、末社水分社修復見積りなど、明治 44 年まで確認できる。

別表から柴田氏の系譜は、次のように続く。

文右衛門—文治郎—文右衛門（文二郎事）—伴文五郎—為吉—茂兵衛

柴田氏は、八幡平谷町を拠点として、寛保元年（1741）から明治 44 年（1911）までの 170 年間、八幡の檜皮師として代々活躍した職人の家系であった。

なお、棟札⑥は、昭和9年（1934）室戸台風の翌年に修復した棟札である。そこには、昭和9年9月20日午前7時30分風速60マイルの暴風雨に襲われ、村の民家12戸が倒壊、3戸が半壊した。神社も拝殿社務所が木つ端微塵になぎ倒され、社殿は30度傾き、境内の大木は折れ、屋根は飛び、社殿を取り囲む高塀と鳥居は倒れたと被害の様子を記録している。修築委員を組織して、当村だけではなく、地方の有志からの淨財を集め修復が完成したと記す。

2. 獅子口瓦

次に社殿大棟の獅子口瓦について、銘文は、112頁史料にあるように、天保11年（1840）2月八幡の瓦師中野勘右衛門の作であり、棟札③の天保11年の修復に合わせて作られたものである。瓦職人の「中野勘右衛門」は、下奈良の天満宮や志水極楽寺、正法寺本堂鳥食などの瓦の箋書にもその名が見られる。別表より寛政10年水分社の棟札にも瓦師「勘右衛門」がある。正法寺の瓦銘からも八幡志水を拠点とする瓦師で、安永年間以降その名が現れ、代替わりしつつ幕末まで継承されたといわれている⁽³⁾。

近年この中野勘右衛門が作製した鬼瓦が八幡長田の農家で確認された。その箋書には「明治四未正月吉日／志水勘右衛門作」とある。また、中ノ山墓地の北向觀音石仏の覆屋に、中野の製作かと思われる「八幡瓦勘」の刻印のある平瓦が残る。瓦師中野勘右衛門家は、明治期に入っても引き続き八幡志水で活動し、社寺だけでなく一般の住宅の瓦も手がけていた。

おわりに

川口天満宮は、慶安2年の新築では、京の住人が施主となり、大工も京から招かれたが、その後は、当村の年寄や神宮寺住職らが中心となって修復を繰り返し、村民の努力によって神社が維持されてきた。その工事では八幡宮境内の諸建物の造営・修復を代々手がける檜皮職人や門前町志水町を拠点とする瓦師がここ川口村においてもその腕を振るった。川口村は石清水八幡宮の社務田中家を本所と仰ぎ、神社の祭祀にも田中家が深く関わってきたとの伝承がある。外郷の川口村は氏神の修復工事にあたる職人についても、石清水八幡宮との関係を濃厚に示している。

【註】

- (1) 西川佳伸家文書第11号（113頁）。本文書は、当家の土蔵取壊しの際の資料調査で発見された。
- (2) 八幡市教育委員会・石清水八幡宮編『石清水八幡宮諸建造物群調査報告書』図版編 2007年。石清水八幡宮『石清水八幡宮摂末社等近代古文書』2008年。両報告書の銘文を年代順に整理したものが別表である。
- (3) 中尾正治「八幡とその近郊に名を残した瓦師」（京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財正法寺本堂修復工事報告書』1992年2月、所収）

棟札⑤【惣高56.3 肩高53.8 上巾13.6 下巾11.8 厚0.8 単位セン】

(表)

檜皮棟梁

社掌

美豆 家村豊吉

京都蛸町正面屋上ル

明治四拾年 総代 西川定治郎

日下部 与八

奉本社家根葺替野地改造施主 氏子中

全 西川幾太郎 全 大和常吉

九月廿五日 全 中村三良兵衛 大工八幡町

中川信太郎

(裏) 無し

大棟 獅子口瓦
「天保十一庚子歳
二月中旬作之」
城州八幡
瓦司

中野勘右衛門

棟札⑥【惣高45.3 肩高42.3 上巾13.8 下巾11.7 厚0.7 単位セン】

(表)

社掌

修築委員

「昭和十年十二月

社掌

修築委員

奥村宇一郎

修築委員

惣代

修築委員

高橋伊之助

修築幹事

西川嘉一郎

修築幹事

修築幹事

修築幹事

奥村春太郎

修築幹事

家村仁三郎

修築幹事

大工大坂 高木正三郎

（裏）

〔昭和九年九月二十日午前七時三十分
俄然風速六十哩ノ暴風雨猛然トシテ
襲来シ瞬時ニシテ民家倒潰十二戸〕

半瀆三戸ヲ出シ当神域ノ拝殿社務所ハ木葉微埃ニ難キ倒サレ社殿ハ三十度傾斜シ大木ハ折レ御屋根ハ飛ビ高塀及鳥居ハ倒レ其慘状

実ニ言語ニ絶セリ於茲ニ吾等同志ヲ集ヒ當村出身者ヲ歴防シ其ノ同情ヲ求メ又地方有志者ノ清キ寄進ヲ迎ギ以テ社殿及高塀鳥居ヲ修理完成ス」

「川口村天満宮縁起」

平安城北野天満天神者
人王六十二代村上天皇
天曆元年九月九日始而
奉祝聖廟矣爰洛陽之南
綴喜郡河口村 天神者
人王六十六代一条院御
宇長徳元年乙未五月四
日出現矣相続而諸邦雖
奉勸請統而此所之尊社
勿論最初也如何者其此
何某乎尊家之公卿住宇
治之里事時自雄徳山之
辺顯于光遍照於虛空其
精輝殆瑩於宇治山頭也
人民挙而怪之彼公卿以
官使八人遣雄徳山近里
而委細尋之始無知者然
處平田村一人之有陰陽
師彼者為案內行々相尋
既至河口村避於此社而
三町余當巽方有一池及

夜陰自池中發於光明忽

奉拝 天神六体之尊像
官使恐怖齋戒而奉加守
護各歸宇治里俱件詰
公卿便以其趣速奏君主

不仰其誠乎
稽首再拝
出現之所者謂天神崎也
參詣之輩為使銘于丹腑
旧記之記述執其要令伝
写畢神之格思不可度豈
不仰其誠乎

御門觀感最深甚也倉卒
有宣下而創造於大社奉

宮遷尊像此所村園皆以
被寄社領畢自其此來如
在之禮典嚴重也雖然時

寛文九乙酉
季秋上五
領主田中

雜掌

別表 川口天満宮及び石清水八幡宮摂末社屋根修復職人整理表

建築名称	年月日	西暦	屋根職人
石清水八幡宮末社一童社本殿	寛保元年 6 月	1741	檜皮師文右衛門・同太兵衛
石清水八幡宮摂社石清水社本殿	宝暦 3 年 4 月 3 日	1753	屋根屋平谷町弥兵衛
石清水八幡宮摂社石清水社本殿	天明 8 年 10 月 11 日	1788	檜皮師柴田文治郎・吉井弥右衛門・小兵衛・清兵衛・弥兵衛・理助・宇右衛門
川口天満宮	寛政 10 年 3 月 25 日	1798	檜皮司城州吉井太郎兵衛正信／梁頭八幡住吉井弥兵衛正吉／細工人同所清兵衛／伏見長兵衛
石清水八幡宮末社水分社本殿	寛政 10 年 6 月 8 日	1798	屋根工文二郎・弥兵衛・瓦師勘右衛門
石清水八幡宮摂社石清水社本殿	文化 12 年 10 月 15 日	1815	檜皮師柴田文右衛門（文二郎事）・文五郎
石清水八幡宮摂社石清水社神水社	文化 12 年	1815	屋根工文右衛門・伴文五郎・善兵衛
石清水八幡宮末社三女神社本殿	文政 6 年 6 月	1823	屋根工平谷丁善兵衛・同文右衛門
川口天満宮	天保 11 年 4 月 3 日	1840	八幡平谷町棟梁檜皮師文右衛門／スケ京吉兵衛／京八之助／同音吉
石清水八幡宮摂社石清水社本殿	安政 4 年 11 月	1857	檜皮師文右衛門・瓦師勘右衛門
川口天満宮	明治 7 年 5 月 15 日	1874	檜皮職八幡庄柴田文右衛門
石清水八幡宮摂社高良社本殿	明治 17 年 5 月 6 日	1884	檜皮師柴田為吉
石清水八幡宮摂社住吉社本殿	明治 27 年 5 月 10 日	1894	檜皮職柴田茂兵衛
石清水八幡宮末社貴船・龍田社本殿	明治 27 年 5 月 10 日	1894	檜皮職柴田茂兵衛
石清水八幡宮末社三女神社本殿	明治 27 年 5 月 10 日	1894	檜皮職柴田茂兵衛
石清水八幡宮末社一童社本殿	明治 28 年 3 月	1895	葺工柴田茂兵衛
石清水八幡宮末社三女神社本殿	明治 35 年 4 月 9 日	1902	檜皮師柴田茂兵衛
川口天満宮	明治 40 年	1907	檜皮棟梁京都蛸町正面上ル日下部与八／職工石田駒吉
石清水八幡宮末社水分社本殿	明治 44 年 2 月 4 日	1911	檜皮師柴田茂兵衛

本表は、川口天満宮棟札銘文と『石清水八幡宮諸建造物群調査報告書』（八幡市教育委員会・石清水八幡宮、2007 年刊行）の棟札銘文及び『石清水八幡宮摂末社等近代古文書』（石清水八幡宮、2008 年発行）をもとに年代順に整理した。

表紙の解説

	1 2 3
5 (裏)	4
	(表)

- 1 聞き取り調査の様子
- 2 善法律寺と紅葉（提供：善法律寺）
- 3 石造物調査の様子
- 4 安居橋と桜（撮影：中井正寛氏）
- 5 中ノ山墓地 十三仏の阿弥陀像（撮影：中井正寛氏）



京都府立大学文化遺産叢書 第4集

八幡地域の古文書・石造物・景観
－地域文化遺産の情報化－

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

竹中 友里代（同 特任助教）

発 行 京都府立大学文学部歴史学科

〒 606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2011年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル